



令和7年度特集展示・仏像入門から

仏像の修理 ー木彫像の場合ー

Kyushu Historical Museum Exhibition Guide

はじめに

私達のまわりには、寺院や仏堂が数多く存在し、たくさんの仏像が祀られています。これらの仏像の中には、数百年から千年の時を超えて現在に伝えられたものも少なくはありません。日本の仏像の多くは木彫像ですが、木でつくられた仏像が、これだけの長きにわたってその姿を保ち続けていることは、本当に驚くべきことです。

これは、仏像が信仰の対象であり、多くの人々の手によって大切に守られてきたことと深く関わります。仏像に祈りを捧げた人々は、同時に仏像の周囲を清潔に保ち、変化がないかを見守り、必要に応じて定期的な修理を実施してきました。絶え間ないメンテナンスの継続が、デリケートな素材の仏像を今日に伝えてきたと言えるでしょう。ここでは、現在も続けられている仏像の文化財修理について紹介します。

仏像の破損と文化財修理

木でできた仏像は、ある意味、とても脆い存在です。湿気に弱く、虫やカビの被害を受けて朽損が進みますし、火によっても甚大な損傷を受けます。複数の木材を組み合わせて像が構成されている場合には、接合がゆるんで部材が脱落し、像が転倒・倒壊してしまうこともあります。表面に施された漆箔や彩色も剥落すれば像容を損ねますし、台座や光背など複雑な形状をした付属物も壊れやすい存在です。

仏像の破損は、複数の要因が重なり合って深刻化します。そのため、修理をおこなう際には、破損の状態と原因を見極め、どのような手立てが必要となるかを慎重に判断します。また、文化財としての意義をもつ仏像の修理は、オリジナルの部分の損なわないことがとても重要です。傷んだ部材を安易に取りかえるのではなく、古い部材をできるだけ残し、適切な処置をした上で再び取り付けます。漆箔や彩色が剥落してい

る場合にも、新しく塗りかえることはせず、剥落止めを施して表面の保護をはかります。古い姿を大切にしながら、後世に伝える強度を確保すること。文化財を修理する際に最も重視される基本的な考え方です。

一方で、立体構造物である仏像を安定して自立させるためには、欠けた部材を補う必要もでてきます。また、信仰の対象としてふさわしい姿を保つためには手先や持物などを補作する場合があります。これらの補作部分も、像に悪い影響を及ぼしてはいけません。大きさや形状がオリジナルの表現に違和感を生じさせないか、新しい部材を取り付けることで古い部材が傷つかないかといった点にも注意がはられます。

修理に用いられる材料と技法

仏像の修理は、経験を積んだ仏師^{ぶつし}の手によっておこなわれます。用いられる材料と技法は、古くから続いてきた伝統的なものを継承することが基本となっています。これらの伝統技法は、千年に及ぶ過去の実績によって、経年変化の程度や再修理の工法などが把握されており、より安全で確実な修理を実施することが可能であるためです。現代の新しい技法や材料についても開発が進んでいますが、それらは必要性を十分に検討した上で、注意深く導入されるべきものです。



手先の補作

修理の材料・技法は様々ですが、接着・充填には次のようなものが用いられます。

^{うるし}漆：ウルシ科の漆の樹木から採取する樹液です。塗料や接着剤として用いられる素材で、仏像の制作・修理の際には、部材を接着する他、表面に塗布して金箔を貼りつける^{しつぱく}漆箔の材料として用いられます。

^{こくそうし}木屎漆：漆に、麦粉や木粉を混ぜ込んでペースト状にした素材です。粘土のように柔らかく加工が容易で、固化すれば木材のような硬さを持ち、彫刻を施すこともできます。仏像の表面に盛り上げて繊細な形をつくりだすのに用いられます。また、軽度な彫り損じを補修するのにも用いられます。修理の際には、虫損・欠損部分を埋めることにも用いられます。

^{にかわ}膠：動物の皮や骨を煮詰めてつくるゼラチン質の接着剤です。水を加えて熱し、液状に溶かして使います。固まった後も、水分と熱を加えると柔らかくなるので、接着面をきれいにはがすことができ、再修理がしやすい点が大きなメリットです。岩絵具（顔料）の溶剤として彩色にも用いられます。

ふのり：粘りのある海藻を原料とする接着剤です。膠と同様、水を加えて熱し、煮溶かして使います。膠よりも接着力が弱く、布や紙の接着や、彩色の剥落止めなどに用います。

パラロイド樹脂^{じゅし}：アクリル系の合成樹脂です。有機溶剤によって溶解します。昭和20年代頃から文化財の修理に用いられるようになりました。接着剤として用いる他、仏像修理の際には、虫損・朽損等が著しい木材に染み込ませ、木質を強化させることにも用います。樹脂を使うと木の色が濡れたように変化しますので、周囲と違和感なく仕上げるためには仏師の高い技術が必要とされます。こうした新しい材料と技法は、従来の方法では交換せざるを得なかった朽損著しい部材の保護を可能にしました。一方で、まだ経過観察の期間が充分とは言えません。今後の経年変化については、慎重に見守っていく必要があります。

仏像を未来へ

修理は、一度実施すればそれで終わりというわけで



漆に麦粉や木粉を混ぜた木屎漆



注射器で木部にパラロイド樹脂を含浸させる

写真提供：浦仏刻所

はありません。修理の完成は、次の修理に向けての準備期間の始まりです。デリケートな素材でできた日本の文化財は、概ね100年程度の間隔で定期的に修理をされて長い年月を過ごしてきました。仏像というと、制作された時代や作者・発願者などに主な関心が向きがちですが、実は、それと同じくらい、仏像が経てきた長い時間、日常のお世話や修理に関わった人々の存在は重要です。これらの人々なくして、仏像が今日に伝えられることはありませんでした。

私達は今、連綿と続けられてきた保護の取り組みの先端にいます。仏像をさらに後世へと伝えるためには、今後も保護と修理を続けていくことが必要です。今回の展示が、仏像の修理に関心を向けていただく機会のひとつになれることを願っています。

(学芸調査室 國生知子)



編集

発行：令和8年1月6日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <https://kyureki.jp>